

JA全農ウィークリー WEEKLY

3面

総代JAがアメリカで海外事業研修

2面



全農パールライス(株)千葉精米工場で事業の概要などの説明を受ける員外経営管理委員・監事(2面)



メディア懇談であいさつする長澤豊会長(2面)



アメリカCGB社(穀物集荷施設)を視察する総代JA(3面)

員外経営管理委員・監事が
精米工場など視察

- 2 ニュース&トピックス(総合企画部、広報部)
- 4 ニュース&トピックス(広島県本部、米穀部)
- 5 ニュース&トピックス(秋田県本部・岐阜県本部)
- 6 JAズームイン(JA名取岩沼)
- 7 県本部だより(新潟県本部)
- 8 ニュース&トピックス(山形県本部、宮城県本部)
- 9 ニュース&トピックス(広報部、米穀部)
- 10 ニュース&トピックス(営農・技術センター、畜産生産部)
- 11 青果情勢(園芸部)
- 12 コミュニケーション(生活リテール部、JAタウン)



「旬鮮倶楽部」2018年度カタログが完成しました。詳細は12面に掲載



News!



第2回員外経営管理委員・監事の本会施設視察を開催

全農パールライス(株)千葉精米工場と家畜衛生研究所つぶさに

総合企画部



家畜衛生研究所の研究者から説明を聞く員外経営管理委員、監事

長澤会長が「施設視察を通して全農のさまざまな取り組みを知ってもらい、員外経営管理委員・監事の皆さまには全農の自己改革に向けて、ご意見をどんどん出していただきたい」とあいさつし、高尾雅之常務が「パールライスについて」、桑田義文常務が「畜産生産部の3研究所について」を説明し、視察先の概要と各部門の取り組みを紹介しました。

全農パールライス(株)千葉精米工場では、大貝浩平代

全農の事業施設の視察や現場職員との意見交換を通じた本会事業の理解向上を目的に10月31日、員外経営管理委員と監事の第2回事業施設視察を行いました。員外経営管理委員の本川一善委員・高橋俊裕委員・石塚邦雄委員と、大西茂志監事・小宮山澄枝監事・原田昌平監事・秋川健次監事の7人が参加、長澤豊会長と大澤憲一・菅野幸雄両副会長が同行しました。

表取締役社長が精米工場と炊飯工場の概要と特徴について説明。玄米倉庫や玄米搬入施設、製品倉庫を視察し、委員・監事からさまざまな質問が出され、活発に意見交換を行いました。

家畜衛生研究所では、鈴木悟郎所長が研究所の概要と役割を紹介。クリニックセンター細菌検査室や検査ロボット、ウイルス・細菌・病理の各実験室など視察し、最先端の研究機器や研究作業に関する職員の説明に委員・監事は興味深く耳を傾けていました。

長澤会長からは「全農には他にはないこれまで培った長所や得意とする分野がある。これらをさらに伸ばしていく必要がある」とのコメントがありました。

News!



農政・農協記者クラブと初のメディア懇談

会長の地元・山形の郷土料理を囲み懇親

広報部



全農改革の決意を述べた長澤会長あいさつ

全農は11月15日、東京都港区のホテルメルパルク東京で、農水省の農政クラブとJAビルの農協記者クラブ16社の記者と長澤豊経営管理委員会会長、神出元一理事長ら役員との懇談会を開きました。

今回、初開催となったメディアとの懇談会は、長澤会長の出身地・山形県の「芋煮会」をテーマに、本会の事業や取り組み、考え方について正しくメディアに理解いただくとともに、国産農畜産物への理解を深めていただくことを目的としました。

長澤会長は冒頭のあいさつで「全農の事業改革、経営基盤の強化が重要。収益構造を変えながら利益を生み、その利益を組合員に還元する。地方創生のために地方に還元していく」と全農改革の決意を述べました。また、神

出理事長は、協同組合としての全農、自己改革の取り組み、トータル生産コストの取り組みについて説明しました。

中締めには、農政クラブ幹事記者の方から「日本の農業はさまざまなところから注目されている。現場の声や新しいところを組み合わせながらさまざまな可能性を見いだした報道を進め、日本の農業に貢献できるような頑張りたい」とあいさついただきました。

会場では、「芋煮」の他、「山形牛ステーキ」「つや姫のおむすび」など山形県をはじめ、国産農畜産物を提供し、出席した記者からは「おいしい」の声が多く聞かれ好評でした。

全農は今後もメディアとのコミュニケーションを進めていきます。

今年で38回目となる 全農総代海外事業研修を実施

アメリカで肥料原料・飼料穀物集出荷の最前線や
本会直営レストランなど視察



アメリカでの海外事業研修に参加した総代JAの皆さん(全農グレイン(株)集出荷施設で)



ロック&ダムの仕組みの説明を聞く研修参加者



全農グレイン(株)集出荷現場事務所で説明を受ける研修参加者

全農は10月6～15日、アメリカで燐鉱石鉱山、穀物集荷・輸出施設などを訪問し原料情勢に係る見識を深めるため、また農産物価格・流通形態や和牛を中心とした日本産食材の消費動向についての見識を深めるため、全農総代海外事業研修を実施しました。全国各地の総代JAから17人が参加しました。

【総合企画部】

29年度は、まずはニューヨークに降り立ち、全農アメリカ(株)で米国農業の概要などの報告を受けました。その後セントルイス、タンパ、ニューオーリンズ、ロサンゼルスとアメリカ国内を飛行機で移動しました。生産能力世界第2位の肥料メーカー・モザイク社の燐鉱石採掘現場や精製工場、ミシシッピ川にかかるメルビンプライス・ロック&ダム、穀物メジャーとしのぎを削るCGB社と単体では世界最大の飼料穀物の集出荷施設である全農グレイン(株)、和食文化の発信基地である本会直営レストラン「SHIKI BEVERLY HILLS」などを視察する行程で、総移動距離2万4500^キ、地球半周以上の大移動となりました。

その他にも収穫最盛期である穀物農家の作業現場や現地の日系スーパーを訪問

しました。穀物農家の広大な圃場^{はしう}では、1台数千万円するという巨大な農業機械が疾走する様子を見て、日本とのスケールの違いに大変驚かれました。また、ロサンゼルスの日系スーパーでは想像以上に日本の食品が並んでおり、日本食文化が浸透している実態を見ることができました。

参加者からは「この想像を超える現実、日本の農業・農協に大きな圧力を受けると実感した。今回の視察研修を基に自己改革を進め、農家組合員、農業振興、協同組合運動に貢献できるよう取り組みたい」などの感想が聞かれました。

10日間という行程でしたが、若い全農職員がアメリカで奮闘している姿も評価いただけ、大変有意義な研修となりました。

News!



自己改革の実践へ意思結集

JA 営農・経済事業改革実践大会を開催

広島県本部

約140人の役職員が出席した
JA 営農・経済事業改革実践大会



広島県本部は10月27日、広島市内のホテルで「JA 営農・経済事業改革実践大会」を開きました。県内13 JAやJA 広島中央会の役職員など約140人が参加し、トータルコスト低減に向けた取り組み提起や事例紹介を通じて、自己改革の実践に向けた機運を高めました。

JAグループ広島は、第27回JA 広島県大会決議事項の「自己改革で創る農と協同の新時代」実現に向けて、「農業者の所得増大」「農業生産の拡大」「地域の活性化」の実践に取り組んでいます。大会冒頭、広島県本部の水永祐治

を喫緊の課題として挙げ「JA グループが一体的かつ主体的に取り組む必要がある」と述べました。

トータルコスト低減に向けた取り組み提起は、米穀事業、園芸事業、生産資材事業の3部門が行いました。実需者ニーズに合わせた米の多収性品種「あきさかり」の導入や、パートナー市場との連携強化による契約的取引の拡大、肥料の銘柄集約をはじめとするコスト低減に向けた新技術や資材などを提案。また、新規就農者育成や農業経営などについて全国の事例を紹介しました。JA 全農ひろしまは今後とも、JA や関係機関と協力して「農業者の所得増大」「農業生産の拡大」「地域の活性化」に向けて自己改革を推し進めます。

News!



担い手への米の業務用向け契約栽培推進

三重県本部で多収品種の契約栽培を提案

米穀部

全農はJAと連携し、伸長する業務用向け米の契約栽培の取り組みを進めています。第1弾として三重県本部での多収品種への取り組みを紹介します。

三重県本部は全農本所と連携し、作期分散が図れ収量増で所得確保が見込める多収品種（「ほしじるし」など）に取り組んでおり、今年で3年目の29年産では8 JAが30鈴を作付けしました。30年産以降は「新品種部会」の設立を検討するなどさらなる拡大を目指しています。

当初から取り組みを開始したJA みえきたでは、ここ数年で急速に担い手への

農地集積が進み、繁忙期の労力分散や安定販路の確保など担い手が抱える問題解決が喫緊の課題でした。このため、作期分散が図れる晩生の多収品種を選定し、生産性を向上して収益を確保していくと担い手へ生産提案を行い、29年産では10人の担い手が多収品種を作付けしています。

全農は「顔がみえる取引」を基本に、売り先の業務用実需者（冷凍米飯メーカー）と、JA みえきたを新たに結び付け、実需者との意見交換や圃場視察（ほしじょう）を行うなど、長期安定的取引の構築に向けて実需者との関係を築く橋渡しをしています。

担い手からは、安定した多収技術の早期確立などの要望の声もあげられており、今後も担い手の声を踏まえて取り組みを進めていきます。

取り組み全JAを集めた新品種試験栽培総括会議（29年産総括会議は12月5日に開催）





肥料・農薬の直行配送スタート

生産コスト低減で生産者手取り最大化へ

秋田県本部



JA秋田みなみ管内で始まった大規模経営体への肥料・農薬の直行配送

この取り組みは、県本部独自の対策であり、作付面積が15畝以上で、4トン車以上のトラックが1カ所に搬入できる施設・設備などを所有する担い手・経営体を対象に、肥料と農薬をメーカーなどからJAの配送センターを経由せず直送することで、輸送費や労力などを抑えることができます。

今回、肥料約240袋を搬入した農業組合法人高屋すずらんファーム（JA秋田みなみ管内）の相澤重勝代

表理事は「この取り組みを最大限活用し、所得増大につなげたい」と期待しています。

秋田県本部は、今後も持続可能な農業生産・農業経営づくりに取り組み、農業所得の増大と農業生産の拡大、地域の活性化に努めます。

秋田県本部は、トータル生産コストの低減による生産者の手取り最大化に向けた取り組みを進めています。JA秋田みなみ管内で11月6日、大規模経営体への肥料・農薬の直行配送をスタートさせました。

■作業フロー図



農家戸配送受託で出発式

農家の経営を多面的にバックアップへ

岐阜県本部



農家戸配送のスタートでテープカット

当日は桑田博之県本部長、JAぎふの栗本斛朗専務、JAビジネスサポート(株)の川崎博文社長がテープカットし、16台の戸配送車両が一斉に荷物を積んで農家への配送に発進しました。

岐阜県本部は、2004

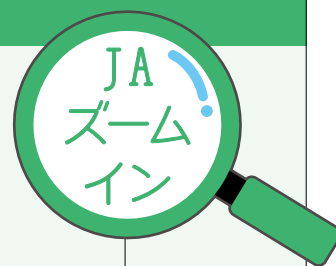
年度に「県域物流マスタープラン」を策定し、県下全域

での戸配送を目指し、物流拠点の設置とJA物流業務の受託を進めています。拠点の設置は3拠点目、物流業務受託は4JA目となり、農家戸配送受託は県下で50%を超える状況になります。

JAぎふは、職員による配送を委託することで営農指導業務を強化、営農経済事業体制の効率化により資材コストの削減を図り、農業者の経営を多面的にバックアップし所得増大を目指します。

岐阜県本部は、今後も「県域物流マスタープラン」を基本に、JA・関連会社と一体となって、県下全域での農家戸配送の受託を拡大していきます。

岐阜県本部は11月1日、JAぎふ全域（本店・岐阜市）の肥料・農薬・飼料などの農家戸配送業務を受託し、物流拠点である「岐阜西濃物流センター（本巣市）」で出発式を行いました。



全国有数のセリ産地

伝統野菜通し農業振興

JA名取岩沼は宮城県中南部に位置し、仙台市に隣接する都市近郊JAとして、

金融・共済事業に加え、稲作・園芸施設野菜などの生産振興に力を入れており、特

集荷所に続々と集まるセリ

上余田芹出荷組合の皆さん



にセリの出荷は、全国でも有数の産地です。

江戸時代初期から続くセリの栽培

セリ栽培の歴史は古く、江戸時代にまでさかのぼります。文献によれば、1620年から野生のセリ栽培が始まり、その後、セリの改良と共にセリ栽培が普及したといわれています。

JA名取岩沼の「仙台セリ」は、豊富な地下水を利用して「せり田」で栽培されており、腰まで水に浸かっての収穫や、洗浄・選別などをすべて手作業で行っており、現在では57人の生産者が栽培しています。

仙台セリは、地元ではお正月の雑煮には欠かせない

JA名取岩沼 (宮城県)



概要

平成29年3月31日現在

正組合員数	4954人
准組合員数	1715人
職員数	188人
販売品取扱高	27億1千万円
購買品取扱高	17億円
貯金残高	560億8千万円
長期共済保有高	2147億4千万円
主な農産物	セリ、チンゲンサイ、小松菜、雪菜、ミョウガタケなど



洗浄・選別後に箱詰め

強化とPR活動を行っています。また、小中学校の体験学習や園場の見学にも積極的に協力しており、地元の伝統野菜への理解を深めています。

セリの主な出荷時期は9〜4月で、1〜2月が最も出荷量が多い「旬」となっており、これから出荷最盛期を迎えます。

JA名取岩沼は、都市近郊JAの特徴を生かし、セリやミョウガタケなどの伝統野菜の生産振興を通して、地域農業の振興・確立を進めています。

販売強化とともに伝統野菜のPRも

JA名取岩沼では、レシピの作製・配布や、試食販売会を実施して、地元の飲食店や首都圏方面への販売

県本部 だより

新潟県本部



フレコン出荷に対応 米広域集出荷施設稼働 温湿度・穀温監視システムで品質保持

稼働した新潟米
広域集出荷施設

新潟県本部は8月、新潟市に隣接する北蒲原郡聖籠町で建設していた「新潟米広域集出荷施設」を稼働させ

ました。

**フレコン検査場を併設
収容力2万トンの低温倉庫**

近年、県内農業倉庫の収容力不足から、恒常的に営業倉庫への集約保管を実施せざるを得ない状況にあり、特に県外営業倉庫保管などにかかる経費の削減が課題となっていました。

また、大規模生産者のフレ

コン出荷のニーズが高まる中、JAの既存施設ではフレコン集荷拡大が難しく、インフラ整備が喫緊の課題となっていました。

こうした課題を解決するため、集荷・集約保管の拠点としてフレコン検査場を併設した収容力2万トンの低温倉庫を建設しました。

**倉庫入口前に大きな前室
スムーズな入出庫が可能に**

この施設は、倉庫入口前が幅15mの前室となっており、天候の悪い冬場であっても、スムーズな入出庫作業が可能です。

また、「温湿度・穀温監視システム」を備えており、より一層の品質保持を図ることが出来ます。

この施設の稼働により、流通コスト削減による生産者手取りの向上と、安定した低温保管による新潟米のさらなる信頼確保に貢献していきます。



広い前室でスムーズな入出庫作業



大規模生産者が出荷したフレコン

News!



ハワイで「つや姫」トップセールス

現地での販売定着と米国本土上陸見据え

山形県本部

ハワイの店頭でトップセールスを
行う長澤会長(右から3人目)



昨年からは県産米のハワイ輸出が始まり、現地消費者への販売定着と米国本土の上陸に向けた販促活動を行うため、長澤豊山形県本部運営委員会会長が現地に入りPRしました。

山形県本部と山形県は米国ハワイ州で11月3、4の両日(現地時間)、日本の商材を多く扱うスーパーマーケット3店で県産米「つや姫」トップセールスを行いました。



来店者に「つや姫」と「ハワイアンウォーター」のペットボトルをプレゼントする長澤会長

は、2010年のデビュー以来、高品質・高食味を維持しており、その地位を不動のものとしている。これからもよろしく願いたい」と述べました。

サンヌードル社の舄木栄人社長やニジヤマーケットの中島祥孝支店長、ハワイ山形県人会の齋藤譲一会長が「つや姫」のおいしさなどをアピール。イベント最後に「つや姫」と「ハワイアンウォーター」のペットボトルをプレゼントしました。

News!



「宮城蔵王産豊水梨」ベトナムへ初輸出

ホーチミン市のイオンでPRフェア

宮城県本部



児童養護施設へ「宮城県蔵王産豊水梨」を贈呈



ホーチミン市でのPRフェア開幕を祝って関係者がテープカット

PRフェアは、イオンベトナム・日本貿易振興機構の協力で開催されました。JAみやぎ仙南組合長・県本部長・宮城県・蔵王町など関係機関から11人が現地に入り、試食を勧め会場は多くのお客さまで賑わいました。

ホーチミンは夏のような気温であったため、現地の子どもは甘くてみずみずしい「宮城蔵王産豊水梨」を試食して満面の笑顔を浮かべていました。それを見た現地のほうが、次々と梨を購入していく姿が多く見られました。

「宮城県蔵王産豊水梨」は、ベトナムのイオン店舗、イオン系コンビニ約60店舗で販売されました。さらに児童養護施設へ「宮城県蔵王産豊水梨」50箱を贈りました。

これを契機に宮城県本部は、生産者、JA、行政と一体となり東南アジアへの農産物の輸出拡大に取り組んでいきます。

日本産梨のベトナム向け輸出の解禁を受け、宮城県本部はJAみやぎ仙南と連携し「宮城蔵王産豊水梨」5箱を輸出しました。ホーチミン市の大型ショッピングモールのイオン(タンフォーセラドン店)で10月14、15日、PRフェアを開催し「宮城蔵王産豊水梨」のおいしさを現地の消費者にPRしました。



次世代を担う子どもたちを「くまもとのお米」で応援

卓球大会(カデットの部)で全農の取り組みをPR

広報部

入賞者へ熊本県産のお米などを贈呈



大会には各都道府県予選を勝ち抜いた800人の選手が出場し、熱戦を繰り広げました。

全農は、各部門の優勝者から3位の選手に熊本県産のお米「二度のときめき」「森のくまさん」「くまさんの力」を合計1440^{kg}、くまもとと売れる米づくり推進本部からは、「いいね! くまもとのお米グッズ」を贈呈しました。

中学生以下の卓球大会、平成29年度全日本卓球選手権大会(カデットの部)の全国大会が11月10〜12日、熊本市で開かれ、全農が特別協賛し上位入賞者に「くまもとのお米」を贈りました。

ブースでは熊本県産のお米をPR



た。優勝者への副賞が「お米120^{kg}」とアナウンスされると、場内からは歓声が上がりました。

また、会場内のブースでは熊本県産のお米や販促グッズを展示し、来場者へ全農の取り組みをPRしました。

全農はこれからも、ニッポンの食を通じて、子どもたちの夢や成長を応援していきます。



第37回全国きき酒選手権大会に協賛

日本酒ファンの祭典でハイレベルな大接戦

米穀部



「個人の部」で上位入賞を果たした3人(中央)

地方予選を突破した70人の各県代表選手が、「個人の部」と代表チームによる「団体の部」で、日本酒の知識と日頃鍛えた感覚を競い合いました。特別枠として定着した「大学対抗の部」には12大学24人が参戦し、昨年からは始まった「インターナショナルの部」では8カ国18人の外国人選手が競いました。

「個人の部」本選は近年まれにみる大接戦となり、2度のプレーオフの末、熊本県代表が日本一の栄冠に輝き、筆記・きき酒ともに満点と

平成29年の日本酒きき酒日本一を決める「第37回全国きき酒選手権大会」(日本酒造組合中央会主催、全農協賛)が10月27日、東京・白金台のシェラトン都ホテル東京で開かれました。

いう最高の成績を収めました。「団体の部」は高知県チームが2連覇を果たし、今回で3回目の優勝となりました。「大学対抗の部」では東京大学が、「インターナショナルの部」では米国代表がそれぞれ初優勝を飾りました。

各部門で入賞された皆さんには、全農賞として「おこめギフト券」を贈呈しました。

クールジャパン戦略の効果もあり、日本酒の海外への輸出拡大と評価が高まっている中、全農は、産地とお客様に複数年契約などを推進し、おいしい日本酒造りに欠かせない高品質な原料米の安定供給を通じて、今後も安定的な日本酒造りに寄与するとともに、今回のような日本酒ファンを増やす機会を通じて「国酒」日本酒のPRにも積極に取り組みます。

News!



検査データの営農指導への有効活用討議

平成29年度JAグループ残留農薬分析研究会を開催

営農・技術センター（残留農薬検査室）



検査データの活用などを話し合った平成29年度JAグループ残留農薬分析研究会

研究会は、専門家による講演会と技術者同士の意見交換会で構成され、今回は「農薬を取り巻く情勢と生産現場の課題」（岐阜県農業技術センター・天野講師）、「ぎふクリーン農業研究センターにおける残留農薬分析への取り組み」出荷前自主検査への対応（一般社団法人ぎふクリーン農業研究センター・豊岡講師）、「レタスを用いた技能試験（概要と講評）」（一般社団法人日本食品分析センター・中村講師）について、説明を受

営農・技術センター残留農薬検査室は10月5、6日、神奈川県平塚市の営農・技術センターで平成29年度JAグループ残留農薬分析研究会を開きました。

けました。

意見交換会は、検査データの営農指導への有効活用をテーマに行いました。共通していたことは、分析機関だけでは解析データを有効利用することは難しく、関係者の協力を得ること、さらには県の職員などにも加わってもらい共通認識を持ち、営農指導などにつなげていくことが重要であることが示唆されました。

この研究会は残留農薬検査に関する知識・技術向上と情報交換を目的とし、JAグループの営農・残留農薬検査関係者を集め、2001年から開催し今年で17回目です。

全農では、今後もJAグループ残留農薬分析研究会を開き、講演会と意見交換を通じてJAグループの残留農薬分析のレベルアップと相互理解を図っていきます。

News!



27年目の「中研フェア」例年以上のにぎわい

地域の方との交流、すっかり定着

畜産生産部（飼料畜産中央研究所）



人気を集めた中研産「全農ハイコープ豚肉」の焼き肉

平成3年から毎年行っているこの行事も今年で27年目となり、例年の来場者数の500人を上回る584人の方々を迎え、大盛況となりました。

中研フェアの一番人気は、日ごろの研究成果が詰まった、ジューシーで臭みがなく柔らかい中研産「全農ハイコープ豚肉」の焼き肉で、これに加え国産和牛の焼き肉やパールライスのおにぎ

飼料畜産中央研究所（茨城県つくば市）は11月11日、地域への日頃の感謝と、研究所の取り組みを紹介するため、地域の方々を招いた「中研フェア」を開きました。



職員の指導で研究成果を学ぶ子ども

りなどです。安全で新鮮な国産農畜産物はとてもおいしく、子どもたちからお年寄りまで大変好評でした。また、家畜の基礎知識や研究成果の一部をパネルと実演で説明し、研究所への理解を深めてもらいました。子どもたちには、飼料の重さ当てゲーム、輪投げ、ヨーヨー釣りなどを用意し、穏やかな秋空の下、家族や友達と楽しんでもらい、笑顔にあふれた時間を過ごしてもらいました。

[青 果 情 勢]

(園 芸 部)



野 菜

主力産地は関東以西

概 況

12月も先月に引き続き、パレシヨ・タマネギなどを除き、西南暖地と関東産地を中心に出荷されます。

キャベツは、愛知・千葉・神奈川などが中心の出荷となります。10月の天候不順などの影響で、小玉傾向、^{ほじょう}圃場でのロスが見られる見込みです。出荷量は、前年を下回る見込みです。

ハクサイは、茨城が中心の出荷となります。根張り遅れなどにより生育は遅延傾向で、小玉での出荷となる見込みです。出荷量は、前年を下回る見込みです。

レタスは、茨城から静岡・兵庫・香川などに切り替わります。関東産地の切り上がりは早めの見込み。西南暖地などの生育はやや遅れています。出荷量は、前年を下回る見込みです。

ダイコンは、千葉・神奈川などが中心の出荷となります。台風の影響で細物中心の出荷となる見込みです。西日本産地も肥大が鈍く、総体の出荷量は、前年を下回る見込みです。

ニンジン、小松菜などが中心の出荷となります。台風の影響を受けた産地もありますが、台風の影響が少なかった産地の生育は順調となっています。総体の出荷量は、前年並みを見込みます。

トマトは、熊本・愛知・静岡などが中心の出荷となります。天候不順の影響で生育は遅れていましたが、徐々に回復する見込み。出荷量は、前年並みを見込みます。

キュウリは、関東産地・西南暖地が中心の出荷となります。関東は生育がやや遅れ気味ですが、西南暖地は順調な生育となっています。出荷量は、前年をやや下回る見込みです。

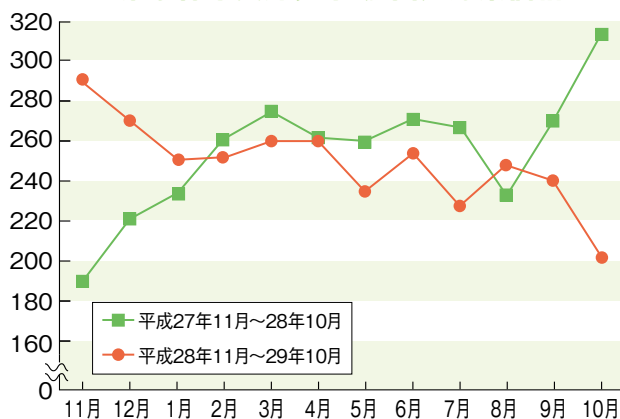
タマネギは、北海道が中心の出荷となります。出荷量は、前年並みの見込みです。

パレシヨは、北海道・長崎からの出荷となります。出荷量は、前年をやや下回る見込みです。

店 頭

今月は特に、下旬にかけて冬至・クリスマス・年末商戦と売り場が活発に展開されます。冬至にはユズ・カボチャ・鍋物野菜・煮物野菜を中心に、クリスマスにはレタス・トマトなどの洋風の野菜を中心に、また年末には金時ニンジン・三浦ダイコン・クワイなど、この時期しか見かけない正月料理用の野菜も多数陳列され、野菜売り場が活気付きます。

円/㎏ 東京都中央卸売市場 国産野菜価格



果 実

ミカン・リンゴ・イチゴの最需要期

概 況

12月はミカン・リンゴ・イチゴが最需要期に向けて各産地から出回ります。

ミカン類は、愛媛・長崎・和歌山などが中心の出荷となります。早生種に加え、中旬からは中生種の出荷も徐々に開始されます。肥大は良好ですが、出荷量は、中生種以降前年よりやや少なくなる見込みです。

リンゴは、青森・長野などから「ふじ」を中心に出荷されます。小玉傾向の産地もありますが、出荷量は前年を上回る見込みです。

柿は、福岡・奈良などが中心の出荷となります。生果は上旬までの出回りで、以降は貯蔵物の販売となります。貯蔵量はおおむね前年並となる見込みです。

イチゴは、栃木・福岡・佐賀・静岡などが中心の出荷となります。各産地とも曇天により生育は遅れ気味ですが、肥大は順調で、出荷量も前年をやや上回る見込みです。

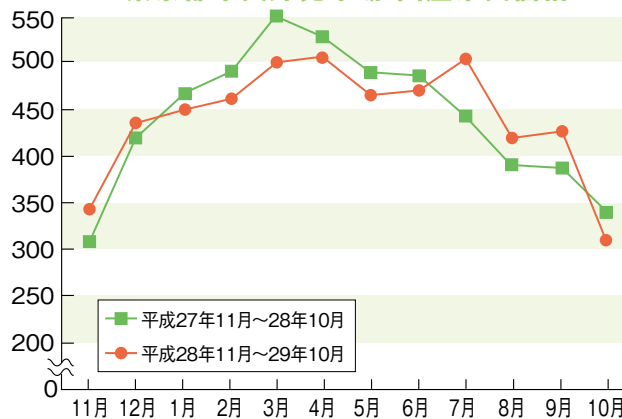
西洋梨は、山形の「ラ・フランス」は小玉傾向で出荷量は前年をやや下回る見込みで、新潟の「ルレクチエ」は大玉傾向で、出荷量も前年を上回る見込みです。

アールスメロンは、熊本・静岡などが中心の出荷となります。出荷量は前年をやや上回る見込みです。

店 頭

12月は冷え込みが厳しくなり、冬至・クリスマス・大みそかななどのイベントが連続することなどにより、家にいる機会が多くなり、ミカン・リンゴ・干し柿の需要が多くなる時期となります。また、クリスマスに向けてはイチゴを中心に果物売り場が展開されます。

円/㎏ 東京都中央卸売市場 国産果実価格



主産県 だより

11月は、イチゴ、レタス、ピーマン、トマト・ミニトマトの主産県が一堂に会し、作況見通しや販売対策の共有化、消費拡大の進め方について協議しました。今後も主産県による情報交換会などを定期的に開催し、出荷情報や販売情報の共有を図ります。

「旬鮮倶楽部」 2018年度カタログ完成 ～新たに「産地特集」・「夏特集」企画を実施～

生活リテール部は、北海道から沖縄まで全国各地の旬の果実を中心に毎月ご家庭まで産地直送でお届けする頒布会事業「旬鮮倶楽部」に取り組んでいます。2018年度版カタログが完成し、現在、皆さまのご注文を受け付けています。
【生活リテール部】

カタログでは、JAグループの厳選果実や農畜産物加工品、スイーツなど全175品を取りそろえました。今年度から新たに「産地特集」ページを設け、こだわり商品の特徴や産地情報をふんだんに盛り込むなど、読んで楽しい・選んでうれしい一冊に仕上がっています。

全国の生産者が丹精込めて育てた旬の果実に、国産原料優先使用のこだわり商品。皆さんもぜひ、この機会にお試しください。

お申込
受付中!
ご注文は
JA窓口へ



2018年度企画のご注文は、平成30年1月下旬まで全国の各JA窓口で承っております(一部お取り扱いのないJAもございますのでご了承ください)。
旬鮮倶楽部のお問い合わせは、全農生活担当部署までお願いします。



「食と農」の情報を広く消費者へ!
スマホアプリを公開中

JA全農のイベントや新商品に関する最新情報がさらに充実! 作動環境: スマートフォン iOS8以上 Android4.3以上



JAタウン
ショップ紹介

JAタウン | 検索
クリック

JA全農ちば 愛情いちばん館



ゆで落花生「おおまさり」(大粒品種)&煎り落花生(殻付き)お試しセット(各200g×1袋)……2500円

JA全農ちば 愛情いちばん館より、落花生の新豆をご紹介します。希少な大粒品種「おおまさり」は1さや5割前後の大きな品種! 甘味たっぷりのやわらかさも魅力の「おおまさり」を生からレトルト調理しました(産地ならではの食べ方のゆで落花生です)。

じっくり煎り上げた風味と香りの殻付き落花生は、つつい手が出てしまうクセになるおいしさ。袋を開けた瞬間の香ばしい香りもたまらない楽しみの一つです!

「おおまさり」と、定番の「殻付き煎り落花生」のセットをこの機会にぜひ、お試しください!!

なお、ご紹介した商品は、12/22(金)まで、FAXでもご注文を承ります(ご自宅宛金引換のみ)。

【ご注文方法】①商品名、規格、数量②郵便番号③住所④氏名⑤電話番号⑥FAX番号をご記入のうえ、FAX番号03-5218-2517までご送信ください。
商品代金のほか、お届け先により送料が必要となります。

JA全農のインターネット ▶ご注文は <http://www.ja-town.com>
ショッピングモール ▶お問い合わせは shop@ja-town1.com

※本誌を通じていただいた注文などで取得した個人情報は、商品等の発送にのみ使用します。